

文化財保全活動の射程

被災・救出・安定化、そして…

白 水 智

昨二〇一九年、千葉県は相次ぐ台風で大きな被害を受けた。九月九日に襲来した台風一五号と一〇月二二日の一九号である。中でも一五号は記録的な暴風が吹き荒れ、県内各所に大きな爪痕を残した。台風が未明に通過したちようどその日の昼前、私は海外から成田空港へ帰国したところだった。着陸直前の機内から見た地上の様子で目についたのは、随所で無残に剥がれたビニールハウスの有様であった。その後、徐々に被災状況が明らかになると、千葉県のとくに南部が激しい被害を受けていることもわかってきた。房総半島南端の館山市とは以前からご縁があり、当地で精力的に歴史文化の発掘、普及活動を行ってきたNPO法人「安房文化遺産フォーラム」

には毎年お世話になっていた。そしてまもなく、同NPOから、文化財救援依頼が舞い込んできた。そこで、被災から一週間後の九月一六日、現地へ向かった。館山駅近くでNPOメンバーと待ち合わせて向かったのは、千葉県の有形文化財に指定されている旧安房南高校の校舎である。前身が千葉県立安房高等女学校であった建物で、薄桃色の見事な木造校舎が文化財となっている。この目撃した際も、たまたま市内に避難勧告が出るほどの豪雨の最中で、台風で破損した屋根から大量の水が屋内に流れ込み、一階も二階も、廊下や教室が傘を差さないといられないほど盛大に雨漏りをしていた。連れの学生とともに天井や柱の上部からブルーシートを上げ、雨水をバケツに誘導する応急処置を各所で行ったが、それだけで三時間あまりを費やした。その後夕方には、布良地区をNPOの方に案内してもらい、大半の民家の屋根がブルーシートで覆われている相当な被災状況や、竜巻のような突風が通過したらしく境内の大木が根こそぎ倒され、また御輿の取蔵庫が跡形もなく倒潰した布良崎神社の現場を案内してもらった。風害によつて屋根が破損すると、保管されていた古文書などが雨漏りで被災することも多い。今回も布良地区でそのような古文書がある

ことを知らされ、善後策の相談に乗ることになった。水損した古文書は、すでにカビが生えかけていた。直接の風害だけでは済まないのである。

筆者は二〇一一年から、大地震で被災した長野県栄村での文化財保全活動を続けている。当地は、長野県の北端、新潟県に接する豪雪地で、三・一一に起きた東日本大震災の翌朝に震度六強・六弱の地震に見舞われた地域である。被災地域が局所的であったことと、何より太平洋側の津波や原発事故の凄まじさが報道の大半を占めたため、ほとんど全国的には報道されず、「忘れられた大震災」とも呼ばれた。しかし筆者はその一〇年以上前から栄村での歴史調査に毎年数回ずつ通っていた関係で、栄村の被災が他人事ではなく、保全活動に関わることになったのである。そして「地域史料保全有志の会」を立ち上げ、今日までずっと保全活動を継続している。今年には新型コロナウイルスCOVID-19の感染拡大のために未だ現地入りすることができないが(八月中旬現在)、これまでは毎年五回から一〇回の活動を行ってきた。初年度こそ被災文化財の救出が中心となったが、翌年以降は、救出した文化財の整理作業がひたすら続いている。とくに大量の古文書の目録作りにはまだ終わりは見え

ず、この調子だと被災から二〇年はかかるかもしれない。塗方もなく息の長い作業が必要である。しかし、そもそも救出したのは何のためかを考えると、それは文化財を活かすためであった。そして活かすには、史料の内容がわからなければ使いようがない。必要な史料、見たい史料をいつでも探せるように目録しておく作業は、文化財保全の必要な工程なのである。

被災文化財の保全活動という点、もつとも目立つ救出作業自体に注目が集まり、あるいはそれらを当面傷みが進行しないようにするための応急処置(安定化作業)が報道に載ることが多い。しかし大量に救出した文化財のその後が実は最も根気が求められる大変な作業なのである。ひたすら地味で注目されない作業。とりわけ文化財の専門知識をもつ人材のいない栄村のような地域では、「救出しておきましたから、あとはよろしく」では、いずれは救出した文化財も朽ち果てていく運命にある。房総半島南部の風害も、未だに雨漏りでカビだらけの家屋の修復が進まない現状があるという。被災文化財への支援も、「その後」にどれだけの精力と根気を注入できるかが、今後につながる重要な分かれ目となるであろう。

(しろうずことし 中央学院大学)

歴史資料としての災害体験

宮坂 新

昨年(二〇一九年)、県内各地を襲った台風一五号(令和元年房総半島台風)および一九号については、本誌等において指定文化財等の被害状況や、被災資料の保全活動に関する貴重な報告がなされている。大きな災害に直面した際、資料の被災状況把握と保全は、歴史研究や文化財保存に関わる人々にとって、取り組むべき課題と認識されていると言える。

一方、現在のコロナ禍においては、(北海道)浦幌町立博物館や(大阪府)吹田市立博物館のように、手作りマスクやチラシなど現在の社会状況を伝える資料を収集する取組も行われている。突然の人的・物的被害をもたらす自然災害と、徐々に社会に影響を及ぼす感染症との違いはあるが、「災害」と歴史資料との関係を考える上

で興味深い。目の前で起こる災害と人々との関わりを歴史として残そうという発想が地域博物館で生まれた点は大いに納得でき、同様の立場にある多くの学芸員が共感できるものであろう。

さて、筆者が勤務する館山市立博物館では、今年六月、八月の間、前年の台風被災の体験文と写真を募集した。防災の教訓を得るために過去の災害体験を募集する取組は珍しくないと思うが、今回は博物館で保存・活用することを目的に、「あなたの体験を歴史資料として残しませんか?」と呼びかけた点に特徴がある。つまり、発想は新型コロナ関係資料の収集と共通するものと言える。ここでは、筆者が本事業の発案に至った経緯を紹介し、その上で結果と今後の展開についても述べておく。

市内の約三割の世帯が被災した館山市では、多くの市職員が通常業務とは異なる災害対応・復興支援業務を担うこととなった。筆者も博物館業務と並行しながらそれらの業務に携わり、特に昨年十一月、今年一月の間は、支援金や住宅修理等の相談・申請を受け付ける総合支援窓口で勤務していた。この経験が被災体験募集を発案したきっかけである。窓口で家屋の被災状況を聞き取る際、暴風が家を襲ったときの思いや、それにまつわるエ

ピソードなどを語る方が多くおり、思い出して涙する方や言葉にしたことで明るい表情になる方もいた。「戦争のときより大変」という高齢者の感想や、「たまたま仏間に寝ていたら助かった」「一晩中、窓を押さえていた」などのエピソードは、体験した方でないと語れないものである。

こういった話を聞いて筆者が感じたことは、第一に被災体験を言葉にすることの大切さ、第二に歴史資料としての災害体験の重要性である。前者については全くの専門外のため、あくまでも個人的感想であるが、被災体験を語ることは被災者の心の修復・復興につながるということを実感した。被災者は被災した瞬間から復興への道を歩まされており、立ち止まって被災した瞬間の恐かった思いを口にし、共有する場面が無かったように思う。特に、今回の台風では、家の構造や立地によって被害の程度に差があり、「自分はましな方だから」と被害を語ることをためらう方も多し。そのような中、それぞれの体験や思いを率直に語れる場があればと考えていた。

後者は、地域博物館に勤務する者として、こうした一人一人の体験を残したいという思いである。筆者は市内であった空襲について説明する際、必ずあるエピソード

を紹介する。それは、朝から空襲警報が出され、みな防空壕に入っていたが、正午近くに家に戻り始めた隙をういて空襲が起こった、というもので、市内の町内会が刊行した『那古史』(那古地区連合町内会、二〇〇七年)に掲載されている。こういった体験者のエピソードにより、死者数や被害家屋数だけでは伝わりにくい歴史のリアリティが肉付けされるのである。今回の台風も市の歴史上の大きなできごととして語られるようになる。そのときに統計データだけでなく、体験者一人一人のエピソードがあれば、より豊かな歴史が描けるはずである。

以上の思いから、台風体験の募集を発案し、実施に至った。コロナ禍でなければ、公民館等での座談会や聞き取り調査も有効だったと思われるが、現状ではこの方法が最も現実的であった。結果として市内外の二五名と四団体から体験文や写真、復興活動報告などが寄せられた。被災当日、数日後の日記やメモの写しを提供くださった方もおり、歴史資料の収集という点では成功に終わったと言って良い。活用の第一歩として、一部を当館のWEBページで公開しており、今後、災害をテーマとした展示の実施も考えていきたい。

(みやさか・あらた 館山市立博物館)